
Replica ~やさしい嘘~

金本ちはや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Replic~やさしい嘘~

【著者名】

Z8933A

【作者名】

金本ちはや

【あらすじ】

梅雨晴れの空がまぶしい、六月のある日。僕は父に連れられて、隣市の総合病院を訪れた。そこで待っていたのは、忘れがたい邂逅と奇跡だった。【前後編】。

Report～やれこ處～（前）

梅雨晴れの青空に日がくらむよくな、六月の終わり。

「会つてほしい人がいる」

そう言つて父が僕を連れてきたのは、隣市にある総合病院だった。つんと漂つ薬品のにおい。ひとつそりと死を待つよつた重い静けさに満ちた廊下の奥に、その病室はあつた。

小さな個室だった。

「由布子」

ドアを開けた父の肩越しに、ベッドに横たわつている女性が見えた。

父の呼びかけに、女性はなんの反応も寄越さなかつた。枕に頭を乗せて、ぼんやりと、どこか虚ろなまなざしをやまよわせていた。

「由布子」

一度田でよづやく女性はこちらを向いた。

髪の生え際に白いものが窺える。父とそつ歳は変わらない。透明な瞳がガラスのように父を映し、やがて女性はゆつたりと微笑んだ。

「……宗さん」

父の名前は宗介だつた。

今はもう父の古なじみしか口にしない呼び方に、僕は違和感を覚えた。

「どうだ、調子は。ちゃんと食つてるか？」

「ええ……」

パイプ椅子に腰かけながら、父は由布子さんに笑いかけた。由布子さんは嬉しそうに、差しのべられた父の右手を両手で包みこんだ。

「お仕事忙しいのに、わざわざ「めんなさいね

「いや、いいんだ。気にするな」

優しい声。

労るようなその響きを、僕は滅多に聞いたことがなかつた。

ふと、由布子さんの瞳が僕を捉えた。

「……千洋？」

そして、呼びかけられた。

父の手を片手で包んだまま、彼女はもう片方の手を僕に向かって伸ばした。

「千洋、来てくれたのね」「やわらかな笑みが広がる。

だけど僕はその手を取ることができず、ずっと突っ立つたままでいた。

「千洋」

今度は父が呼んだ。
僕は驚いて父を見た。

「どうした、千洋」

父は寡黙な目で、由布子さんが手を取るよう促してきた。
まるで見えない糸で操られるよつ、するすると僕の手が彼女の手を包みこんだ。

自然な行動だった。

「千洋」

純粋な喜びに染まった目が見上げてくる。まるで子供のようないだ。

それだけで、由布子さんがここにいるだれかを見つめていることがわかった。

「父ちゃん……」
飲みものを買いついていくと病室を出た父を、僕はとつてて追いかけた。
まるで僕が来るのを待つっていたかのよつて父は振り返った。

「……どういふことだよ

返事はない。

それでもかまわずに続けた。

「あの人だれ？ 僕にだれのフリをせんの？」

千洋なんて名前、僕は知らない。

父は小さな、けれど重たげなため息をついた。

「……母さんが後添いだつてことは、知ってるな」

僕は頷いた。頷いて……その言葉にこめられた意味に気づいた。

「あの人、父さんの最初の……」

父は困ったような顔をした。

「母さんに出会う一年ほど前だよ、別れたのは」

父と母はひと回り近く歳が離れている。僕は父が四十を過ぎてからできた子どもだった。

その前に、他に子どもがいてもおかしくない。

「千に太平洋の洋と書いて、『ちひろ』と読むんだ」

僕とは十五歳離れた兄だったそうだ。

「生きていれば三十一だ」

父は廊下の談話スペースに置かれた長椅子に腰を下ろすと、呟くように言った。

「ちょうど今のおまえぐらいのときにな」

「……僕は会つたことあるの？」

「いいや、ないよ。千洋はおまえを知っていたけど、会わせてほしいと言われたことはなかった」

会つたこともない兄。

どうして父がぼくをここに連れてきたのか、ようやくわかった気がした。

「由布子さん……もう戻らないの？」

「…………ああ」

父は俯いた。

それでも、床に滴つたものは、はっきりと見えてしまった。

「あいつの時間は、十五年も前に戻っちゃったんだよ

廊下に僕以外の人影はなかつた。

古いものなのか、長椅子の座り心地はあまりよろしくない。それでもずっと立つていてるよりはマシだ。

窓から射す白い陽が落ちて、僕の影が伸びる。陽射しのきつかつた外に比べて、ここはざいぶん涼しかつた。

父は病室に戻つた。

なんとなく居づらくて、結局出てきてしまつた。さびしそうな由

布子さんの顔が脳裏にちらつく。

どうじろつていうんだ。

何を話し、何をすればいいんだ。僕は千洋じやないから、千洋のことなんてわからない。

息が詰まりそうだ。

ついてくるんじやなかつたのかもしれない。

「隣、いい？」

ふと足元に僕のものではない影が落ちていた。履き古されたスニーカーが見える。

「どうぞ」

「ありがとう」

どこかで聞いたような声だ。

そんなことを頭の隅で思いながら、僕は少し間を空けて座つた、見知らぬだれかの足元を見つめていた。

「見舞い？」

軽い調子で訊かれ、僕は「ええ」と頷いた。

「俺もだよ」

やつぱり、聞き覚えがある。

だけど僕が答えを探し当てるよりも早く、向こうが話し出していた。

「俺はね、おふくろの見舞いなんだ」

「……そつ」

「長いこと入院してて……だけど俺、ずっと来れなくてさ」「どこで聞いたんだろ？」「思い出せない。」

「きみは？」

「似たようなもん」

なんだか敬語で答えるのも億劫になつて、つい地が出た。

「……なあ」

「何？」

「きみは……ずっと俺を知らなかつたんだよな」「ため息をつくよつな声だつた。」

僕は少しだけ顔を上げた。

濃紺のスラックスと、白いYシャツ。どこかの学校の夏服だつた。

「俺は、知つてたよ」

ひんやりとした空氣の中で、相手の夏服は爽やかな印象を与える。アイロンがきいていて汚れもないのは、おろしてだからだ。

「会おう会おうって思つてゐるうちに、会えなくなつちゃつたけど。」

……なんとなく、氣恥ずかしくつて

窓明かりがほんのりとした色に染まる。陽が傾きかけていることを僕は知つた。

「今日はありがとう」

僕は完全に顔を上げた。別に上げなくつたつてよかつたけれど、それでも上げずにはいられなかつた。

そこには。

「……千洋」

僕が、いた。

鏡の向こうに見慣れた自分の顔がそこにあつた。服装が違つてゐる それだけだつた。

「驚いたなあ」

千洋は目を細めた。

「ここまでそつくりだとは……俺も思わなかつた」

同じ顔でも、笑い方は由布子さんに似ている気がした。

「……なんで」

「おふくろを迎えて」

笑顔のまま、千洋は答えた。

「でも、俺はあそこへは行けない」

千洋の指が、由布子さんの病室のドアを指し示す。

僕と同じ瞳が、けれども僕の知らない光を湛えていた。

「……お願ひ、できるかな」

何をすべきか。

それが、時を超えた兄弟のつながりといふもののかどつかはわからなけれど。

千洋が望み、僕にしか叶えられないことはわかつた。

「……いいよ」

僕はゆっくりと立ち上がつた。

背中に千洋の視線を感じる。その部分だけ、肌がびりびりと震えているようだつた。

「連れてきてあげるよ」

ありがとうという声が、もう一度聞こえた。

Report～なぜここに歸る～（後）

病室に戻ると、僕はしばりへと由布子さんのやつとつを眺めていた。

「千洋、どうしたの？ 黙りこんじやつて」

由布子さんが心配そうに訊いてくる。僕はじつと彼女を見つめた。

そして。

「おふくろ」

僕の口から、するりと言葉がこぼれ落ちた。

父が目を大きく瞪つたのが視界の隅でわかった。

「話があるんだ。……それで」

僕はちらりと父を見た。

千洋が父のことをなんて呼んでいたか、わからなかつた。たけど、すぐに助け船は出された。

「宗さん」

やんわりと由布子さんが父を呼んだ。

父は僕と由布子さんを見比べていたが、やがて観念したよつと立ち上がつた。すれ違ひ様に僕の肩を叩いて。

小さく軋みながらドアが閉まつた。

そして、沈黙が襲つてきた。

しばらくの間、どちらも口を開かなかつた。

「……ねえ」

沈黙を撃退したのは、由布子さんだった。

「本当の名前は、なんていつの？」

僕ははつと顔を上げた。

しつかりと僕を見つめる、まなざしがあった。

「……宗さんも」

「え？」

「宗さんも、馬鹿ね」

花が咲くように由布子さんの顔が綻ぶ。呆れているような、それでも愛しさに溢れた笑顔。

「最初はね、本当に千洋がいるのかと思つた」

強張つた僕の手に、由布子さんの手がそつと触れてくる。母の手に似た、だけどもつと細くて頼りない、病人の手。

「でも、違うってわかったわ」

「どうですか?」

彼女はくすりと小さく笑つた。

「ほくろよ」

「ほくろ?」

「そう。すいへんちゅうちゅうにけどね、千洋には右田のすぐ下に泣きぼくろがあつたの」

僕の右田の下に、ほくろはない。

「だから、ああ、この子は千洋じゃないんだなって。ねえ、名前を教えてくれる?」

由布子さんがぎゅっと手を握つてきた。

「あの子の弟の名前、知りたいの」

僕は由布子さんの手を握り返しながら、答えた。

「万海です

「かずみ?」

「幾千万の万に海で、『かずみ』です」

この名前は父がつけた。

「そう」

万海と、由布子さんの唇が音を伴わずに動く。やがて彼女は、ふんわりと微笑んだ。

「素敵な名前ね」

窓の外はすっかり暗くなつていた。夜の闇に覆われ、漆黒に塗り

潰されている。

廊下には明かりが灯され、千洋は長椅子に座つたまま待つていた。僕に気づくと、弾かれたように顔を上げた。

本當だ。右目のすぐ下に、うつすらとほくろがあった。

「……由布子さん、さつき

「ああ」

「わかつてたみたいだ」

由布子さんは最期まで笑っていた。
もしかしたら、息子が迎えに来ることも知っていたのかもしない。

「……万海つていうんだよな

ぱつりと千洋が言った。

「知つてたんだ」

「親父に教えてもらつたんだよ。弟の名前は、俺のと意味が通じる
んだつて」

千洋は目を細めた。

生きている人間そのものの姿に、僕は、まるで夢を見ているような錯覚に捉われた。

死んでいるだなんて、全然わからないのに。

「……ホントに」

「もういいよ」

僕は首を横に振った。

「さんざん聞いたし」

「……そつか

千洋は小さく笑つた。僕もつられて笑い返した。

「そろそろ行くよ」

千洋は立ち上ると、僕のすぐ傍らへと手を差しのべた。まるで、だれかの手を取るよう。

「おふくろ」

千洋がそう呼びかけると、だれもいないその場所の空気が滲んだ。

和紙に描いた絵を水に浸けてぼやかしたような、小柄な人影が浮かび上がる。

由布子さんだった。

陽炎のように揺らめく彼女は、微笑み、千洋の手に自分の手を重ねた。

ふたりの手が触れ合つ。

その瞬間、僕の視界が白く染まつた。

溢れる光のなかで、ふたりが並んでどこかへ歩いていく。一度だけ振り返つて、もうそのあとは止まらずに。それが僕の見た、ふたりの最後の姿だった。

どこまでも広がる、鮮やかな青。

学校の夏服に身を包んだ僕は、額に掌を翳し、まぶしい空を見上げた。由布子さんの葬儀の日、天気は気持ちいいくらいの快晴だった。

「ここんところ、ずっと晴れてるわね」

隣に立つた母が、同じように空を見上げて呟いた。

身寄りのなかつた由布子さんの葬儀の喪主は、父が務めていた。

「今年は暑いかもな」

「そうねえ」

去年の夏が涼しかつたから、今年は一段と太陽が近いのかもしない。そんな気がしてならなかつた。

少しだけ視線を落とすと、空に向かつて一筋の黒い煙が立ちのぼつている。由布子さんの遺体は今、焼かれていた。

「あれに乗つて、行くのかしら

「え？」「

「遺体を焼いた煙に乗つて、人の魂は上に行くのかじりぬ違つ。

彼女はもうとつて、あの空の向いに立つてゐる。
僕は流れしていく煙を見つめた。

「ねえ、母さん

「ん？」

「僕があの人に会つて、別になんとも思わなかつた？」
あの日。

父が僕をだれに会わせようとしていたのか、母は知つていた。
「なんとも思わなかつたつていえば、嘘になるわね
答えは正直に返つてきた。

「だけど」

「……だけど？」

ひと呼吸置いて、母は言つた。

「嘘でもいいから最後に何かしてあげたいってお父さんに頭下げられて、『うん』って言つしかなかつたわ

僕は母の横顔を見た。

煙を見上げたまま、母は続けた。

「お父さんがそこまでするなんて、はじめて見たわ。だからね、お母さん、頷いたの」

せめて、幸せな夢のなかで送つてやりたかった
棺の中で花に埋もれて眠る由布子さんを見つめながら、父はそう
言つていた。

結局、あいつは何もかもわかつてたみたいだけな
してやられたと、笑つていた。

黒い煙ははゆるやかに、上へ上へとのぼつてこべ。

まるでふたりへのだれかの想いを、彼らの許へ届けよといさる
う。たゞ、遠く、空の彼方へと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8933a/>

Replica～やさしい嘘～

2010年10月8日13時44分発行